

氏名

野々山 宏

**【はじめに】**

同側型遅発性内リンパ水腫は一側に高度難聴を発症した後、長期間を経て障害耳が原因でめまいをひきおこす疾患であり、その病態は内リンパ水腫である。最近では、遅発性内リンパ水腫の症例にガドリニウム系造影剤を鼓室内投与し、MRI を撮影することにより内リンパ水腫を可視化できるとの報告がある。しかし、同側型遅発性内リンパ水腫症例における対側耳の評価はこれまでされていない。また遅発性内リンパ水腫を標準量のガドリニウム系造影剤を静脈内投与し評価した報告はない。そこでわれわれは同側型遅発性内リンパ水腫の症例 5 例に標準量のガドリニウム系造影剤を静脈内投与した後、MRI を撮影し両側耳の前庭における内リンパ水腫を評価した。

**【方法】**

一般量のガドジアミド(0.2ml/kg)を経静脈的に投与し、外リンパにおける濃度が最高となる投与後 4 時間後に MRI を撮影した。画像の評価は造影剤の分布によって 3 段階で評価した。

**【結果】**

すべての症例で障害耳に内リンパ水腫を認めた。5 例中 4 例においては対側耳においても内リンパ水腫を認めた。5 例中 3 例で障害側の方が対側より大きな水腫を認めた。

**【考察】**

今回の研究でわれわれは同側型遅発性内リンパ水腫において、一般量の造影剤を経静脈的に投与し可視化することに成功した。これまでの障害耳における検査では陽性率が 75-82%であったが、本研究では全例に内リンパ水腫を認められたため有用な検査であると考えられる。罹病期間と障害耳内リンパ水腫の重症度との間に関連性は認められなかったが、発症からの期間が短いものは MRI 所見が比較的軽度であった。

今後はさらに多くの症例において検討し、診断の有用性が改善するガドリニウム造影剤のレジメンを考える必要がある。